
短 報

病棟実習と外来実習を組み合わせた成人看護学実習 (慢性期)における指導体制強化に向けた取り組み

高田 幸江¹⁾ 高橋奈津子¹⁾ 松本 文奈¹⁾

An Approach to Strengthening the Instructional System in Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions) That Combines Ward Care and Outpatient Care

Yukie TAKADA, RN, MSN¹⁾ Natsuko TAKAHASHI, RN, MSN¹⁾ Ayana MATSUMOTO, RN, MSN¹⁾

〔Abstract〕

Based on recent changes in the medical environment, which include reduced lengths of stay in the hospital and an increasing transition toward outpatient treatment, there has been a growing need for outpatient care in chronic illness and conditions nursing, which supports patients and their families on a long-term basis. To address this need, we have, since 2013, conducted nursing practice as part of the Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions) by combining one week of ward care with an additional week of outpatient care. Because students receive training in a variety of departments, it is essential that clinical instructors in each department share both the content and methods of instruction. This sharing of information enables students to realize their practice goals and, as a result, helps reinforce the instructional system as well. Beginning in 2014, we created a tool to indicate “course objectives and the key points for training” in order to further strengthen the coordination in the instructional system between wards and outpatient instructors. Through the sharing of the perspectives of instructors, it was made clear that the instructional system had been reinforced. Furthermore, suggestions for future issues were also obtained.

〔Key words〕 chronic illness and conditions nursing, strengthening of the instructional system, outpatient care, ward care

〔要 旨〕

在院日数の短縮化や治療の外来移行などの近年の医療情勢の変化を踏まえ、患者や家族を長期的に支援する慢性期看護において、外来における看護提供の必要性が高まっている。このことを踏まえ本学では、2013年度から成人看護学実習（慢性期）において、病棟実習1週間、外来実習1週間を組み合わせた臨地実習を行っている。学生が多部門で実習する環境にあるため、各部門の臨床指導者と、学生の実習目標達成に向けて指導内容や指導方法の共有を図り、指導体制を強化する必要があった。2014年度は、「実習目標と指導の視点」を示したツールを作成し、病棟、外来の指導者との指導体制の連携強化に向けて取り組んだ。指導の視点を共有したことにより、指導体制が強化できたことが明らかとなり、更に今後の課題への示唆を得た。

〔キーワード〕 慢性期看護、指導体制強化、外来看護実習、病棟看護実習

1) 聖路加国際大学 成人・高齢者と家族の看護領域 成人看護学（慢性期） St. Luke's International University, Adult, Gerontological, and Family Nursing, Adult Nursing (Chronic Illness and Conditions)

I. はじめに

近年の医療情勢として、生活習慣病を主とした慢性疾患の増加などの疾病構造の変化や、医療費の増大などに伴う入院期間の短縮および治療の外来移行の傾向がある。特に慢性疾患においてはその経過が長期にわたるため、医療提供に伴う看護に加え、患者や家族のセルフケア支援など、外来における看護提供の必要性が高まっている。

成人看護学実習（慢性期）においては、実習目標として、慢性・長期的な健康問題を持つ患者とその家族が、病と共に生きることの認識と対処法を習得し、療養の場の特徴を踏まえて自らの生活を調整・再構築するように援助することを挙げている。これらを学生に習得させるにあたり、従来の病棟実習だけでは、退院後の生活を見据えた長期的な視点や、生活の中に養生法を組み入れながら生活をしている人や家族のセルフケアを支援するという視点において、学びが浅い傾向があった。また、臨地実習病院の特性として、入院患者の高齢化により成人期の患者を受け持つ機会が限られていることや、急性期の加療目的の患者が多いなどの課題があった。これらの背景により、本学では2013年度より、成人看護学実習（慢性期）を病棟実習1週間、外来実習1週間を組み合わせ、2週間2単位の実習として実施している。なお、成人看護学実習（慢性期）の構築に向けた準備と、実習概要については、前号¹⁾に報告済である。

成人看護学実習（慢性期）では学生の実習が多部門にわたる。学生が2週間の実習でそれぞれの療養の場の特性を踏まえて学習を深め、目標達成するために、臨地の指導者と実習目標の共有および指導方針の共有を図り、協働する必要があった。今回、病棟、外来の指導者との指導体制の強化に向けて検討した内容と、その取り組みについて実践報告を行う。

II. 大学教員による実習目標の再検討および指導体制強化のための方略の検討

1. 実習目標の再検討と前提科目とのつながり

多部門にわたる実習部署との連携を図るための第1段階の取り組みとして、成人看護学実習（慢性期）で学生に何を学ばせる必要があるかについて、大学教員間で、実習目標の再検討を行った。

慢性・長期的な健康問題を持つ患者とその家族が、病と共に生きることの認識と対処法を習得し、自らの生活を調整・再構築できるような看護援助を実践していくためには、患者・家族が個々のセルフケア能力を活かし、主体的にセルフマネジメントできるよう支援するという視点²⁾が重要であると考えた。そこで、実習目標の中に、

患者の個性性を考慮することとともに、患者や家族の強み³⁾を活かす視点を盛り込むこととした。具体的には、1—①慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族に現在生じている身体的・心理社会的な健康問題や強みを統合的に把握できる、5. 慢性・長期的な健康問題をもつ患者とその家族の個性や強みを考慮した看護を実践できるなど、実習目標の加筆・修正を行った。なお、「セルフケア」や「セルフマネジメント」については、成人看護学実習（慢性期）の前提科目である成人看護学慢性期実践方法の概論において、また「患者の強み」については、同科目内の事例演習においても強調して学生に指導にあたり、実習において担当する患者の「看護上の問題の解決のために活用できる患者や家族のもつ力（強み）」に着目することの重要性を指導した。

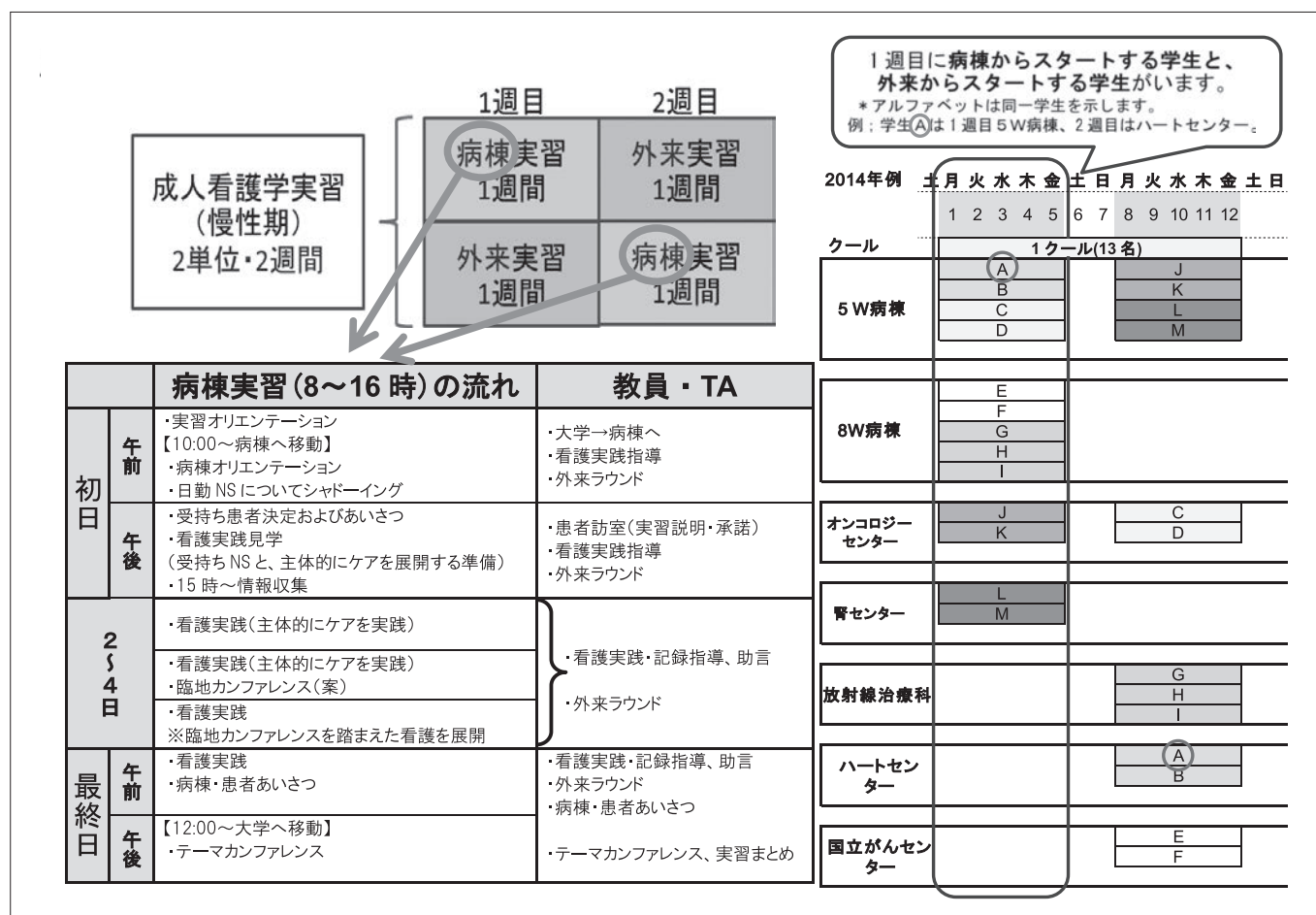
2. 実習目標において、療養の場の特性において学ぶことが可能なものの判別

実習目標の検討を終えた次の段階では、実習目標のうち、特に病棟で学ぶことが可能なもの、特に外来で学ぶことが可能なものを判別する作業を行った。成人看護学実習（慢性期）では、実習前の8月の段階で、2病棟、5外来（他の病院を含む）を実習の場として活用することを予定していた。特に外来部門では、患者来院の時間帯などがまちまちであることなどの物理的な要件により、学部教員が常に実習指導にあたる環境を整えることが困難であるため、実習時間の多くを各外来の学部実習担当者の協力のもとに実習を展開しているという実情があった。このことから、教員が不在の場合であっても、各部署の学部実習担当者が、すべての実習目標の中で、自分の部署において特にどの部分を学べる環境なのかを意識して指導に関わってもらうことで、学生の学びが深まると判断した。外来と病棟、それぞれの療養の場でどの実習目標を特に学ぶことが可能なかを明確化したうえ、その目標達成のための指導ポイントツールの作成の必要性を大学教員間で共有した。

3. 実習の概要と目標達成のための指導ポイントツールの作成と説明

学生がそれぞれの実習の場で学べる目標を明確にすることで、その目標を達成させるためにどのように学生指導にあたってもらいたいかを具体的に明文化し、それぞれ、慢性期実習の概要；成人看護学実習（慢性期）の進行模式図（資料1）、病棟用実習目標と指導の視点；成人看護学実習（慢性期）の目標：今年度からの新たな視点、目標達成に向けた、スタッフ・学部実習担当者・教員の役割（資料2）、外来用実習目標と指導の視点；成人看護学実習（慢性期）の目標と指導の視点について（資料3）として資料を作成した。これらの資料作成の過程

資料1 成人看護学（慢性期）の進行模式図



を通して、外来と病棟での実習の学びを統合させることで、成人看護学実習慢性期の実習目標を学ぶことが可能となることを、大学教員間で再確認した。

Ⅲ. 実習部門との調整

1. 全体会議

成人看護学実習（慢性期）の事前打ち合わせを実習施設の病棟看護管理者、外来看護管理者、学部実習担当者、大学教員で2014年7月に実施した。実習概要の確認と昨年度との変更点（実習目標、評価指標）として、実習目標の中に健康問題だけでなく強みを把握し援助する視点を入れたことを説明した。また本年度より聖路加国際病院で位置づけられた学部実習担当者との連携・調整について、各部署の特性に配慮しながら進めていきたい旨を伝えた。外来部門に対しては、事前学習の内容、実習受け入れが難しい期間などの情報を得て、調整を図ることを伝えた。意見交換では、昨年度の状況から次の課題を共有することができた。特に病棟実習と外来実習の期間に関する課題、外来実習における受け持ち患者の課題、外来実習場所の拡大、病棟との連携について意見があった。病棟側からは病棟実習期間が1週間であることから

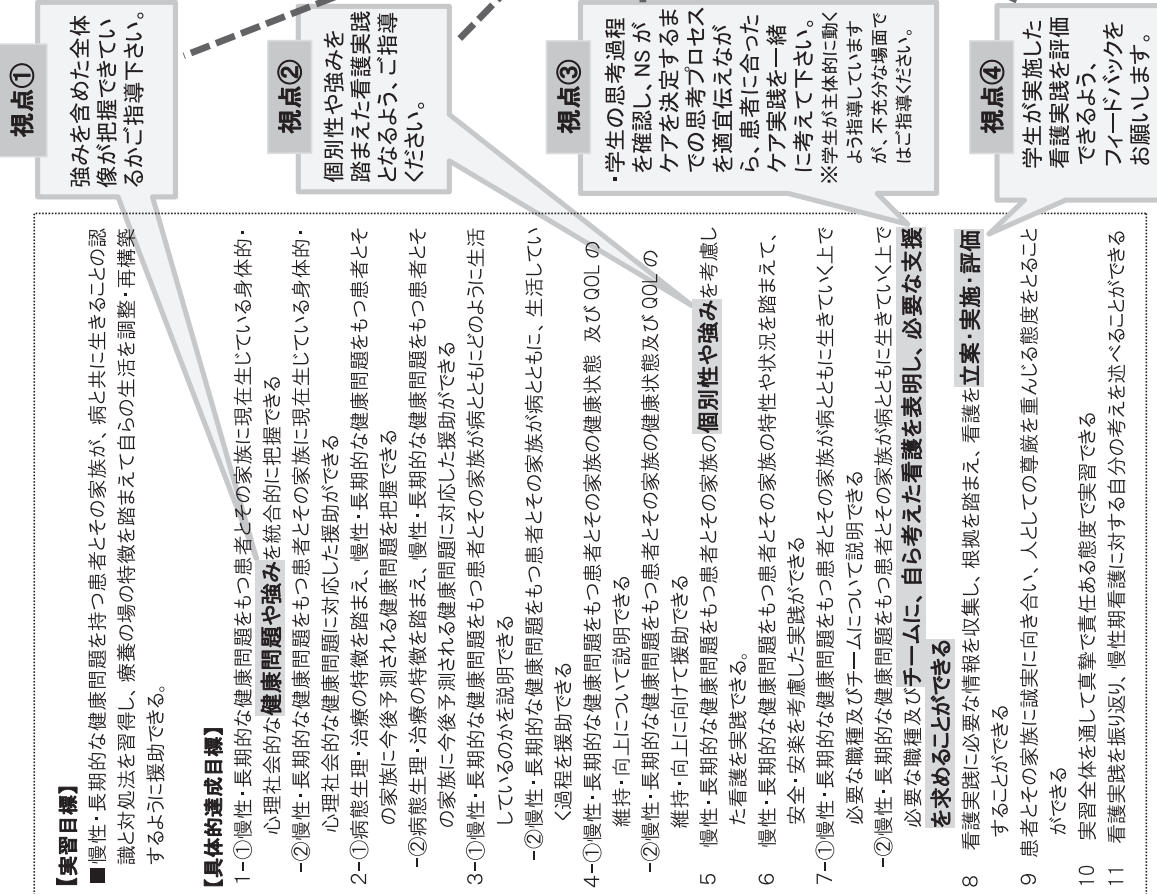
看護過程の展開が不十分なのではないかという指摘があった。改善策としてなるべく受け持ち患者と関わる時間をとるため初日のシャドーイングを午前のみにすること、教員・指導者・スタッフと協働して、日々の看護過程の振り返りと評価を学生に促すことを提案した。外来側からは外来実習期間が1週間あり、受け持ち患者を選定し看護過程の展開を行う実習形態であることから、単なる見学実習に留まることなく学生の学びが深まっているという意見があった。実習期間については、外来での学びが深まっていることに加え、病棟と外来実習の区切りが1週間でない時期の違う学生が同じ部署に存在することとなり学生配置が難しく、昨年通り病棟1週間、外来1週間とした。病棟、外来部門の指導者が一堂に会し意見を交換することで、成人看護学実習（慢性期）の目標達成に向けて、各部署の指導体制強化や協働について考える機会を得た。

2. 病棟との調整

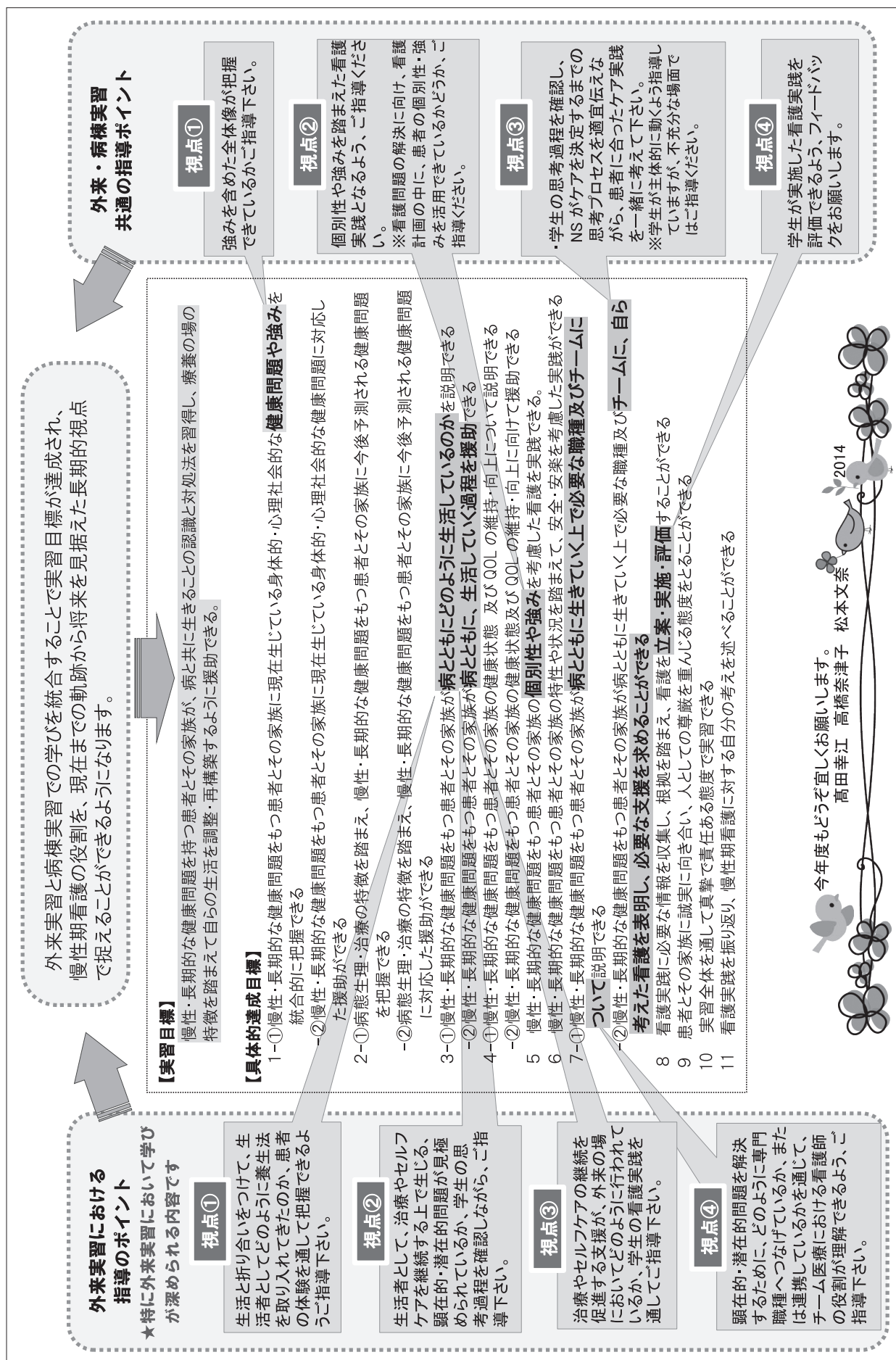
全体会議のあと、病棟実習の場となる病棟看護管理者、学部実習担当者と大学教員間での打合せ会議を8月に実施し、病棟での指導体制強化に向け、学部実習指導者から病棟スタッフへの実習目的・方法及び役割の周知を目

目標達成に向けた、スタッフ・学部実習担当者・教員の役割(案)

実習の流れ	スタッフ	学部実習担当者 (NM, ANM, Ino)	教員 (TA)
当日 朝まで	実習目標・実習内容、実践してもよい看護ケアを理解する。	実習目標・方法、実習体制をスタッフに周知し受け入れ体制を整える。 実習体制・看護ケアや医療処置がどこまで実施可能か相談し、申し合わせる。 (学生の健康問題などの状況も含む)	実習目標・方法を看護管理者、学部に実習担当者に説明。
初日	【病棟オリエンテーション終了後 11:30(8W), 11:45(5W)迄】 学生に看護実践を見せ(学生ができることは参加させる)、適宜説明する。	看護管理者とともに実習目標に適合した患者を選択し、受け持ち患者情報シートを記載する。 実習初日の午前中のシャドローイング(Ns1人につき学生1~2人アサイントをする)。	実習オリエンテーション(学内)終了後、病棟へ到着。アサインメントを確認し、スタッフへ紹介。
	午前	【10:00頃~(15分程度) 病棟オリエンテーションシャドローイング終了後(5分程度)】 受け持ち患者シートをもとに、学生に簡単に説明する。	学生が受け持ち患者を決定する際に助言を行う。 学生と受け持ち患者とをマッチングさせ、患者へ説明し最終許可を得る。
	午後	受け持ち患者のケアを翌日から主体的に展開できるようにケアに参加させる。	学生とともに受け持ち患者へあいさつ 学生に担当 NS へあいさつに行きようを促す。
2, 4 日目	受け持ち患者に関する情報収集の方法、学生の質問に対し助言を行う 学生の出入状況、健康状態に対し連絡・調整 日々の計画と経過記録(様式 2)についての助言と調整。 (業務状況に応じて)	学生が受け持ち患者を決定する際に助言を行う。 学生と受け持ち患者とをマッチングさせ、患者へ説明し最終許可を得る。	学生とともに受け持ち患者へあいさつ 学生に担当 NS へあいさつに行きようを促す。
	【病棟オリエンテーション終了後 11:30(8W), 11:45(5W)迄】 学生に看護実践を見せ(学生ができることは参加させる)、適宜説明する。	看護管理者とともに実習目標に適合した患者を選択し、受け持ち患者情報シートを記載する。 実習初日の午前中のシャドローイング(Ns1人につき学生1~2人アサイントをする)。	実習オリエンテーション(学内)終了後、病棟へ到着。アサインメントを確認し、スタッフへ紹介。
	受け持ち患者のケアを翌日から主体的に展開できるようにケアに参加させる。	学生が受け持ち患者を決定する際に助言を行う。 学生と受け持ち患者とをマッチングさせ、患者へ説明し最終許可を得る。	学生とともに受け持ち患者へあいさつ 学生に担当 NS へあいさつに行きようを促す。
最終日	受け持ち患者に関する情報収集の方法、学生の質問に対し助言を行う 学生の出入状況、健康状態に対し連絡・調整 日々の計画と経過記録(様式 2)についての助言と調整。 (業務状況に応じて)	学生が受け持ち患者を決定する際に助言を行う。 学生と受け持ち患者とをマッチングさせ、患者へ説明し最終許可を得る。	学生とともに受け持ち患者へあいさつ 学生に担当 NS へあいさつに行きようを促す。
	【病棟オリエンテーション終了後 11:30(8W), 11:45(5W)迄】 学生に看護実践を見せ(学生ができることは参加させる)、適宜説明する。	看護管理者とともに実習目標に適合した患者を選択し、受け持ち患者情報シートを記載する。 実習初日の午前中のシャドローイング(Ns1人につき学生1~2人アサイントをする)。	実習オリエンテーション(学内)終了後、病棟へ到着。アサインメントを確認し、スタッフへ紹介。
	受け持ち患者のケアを翌日から主体的に展開できるようにケアに参加させる。	学生が受け持ち患者を決定する際に助言を行う。 学生と受け持ち患者とをマッチングさせ、患者へ説明し最終許可を得る。	学生とともに受け持ち患者へあいさつ 学生に担当 NS へあいさつに行きようを促す。



資料 3 成人看護学実習（慢性期）の目標と指導の視点について



的に作成した資料1、資料2を提示し、説明した。これらの資料は、学部実習担当者から病棟スタッフの方へ説明していただくとともに、病棟スタッフとも共通の視点で学生の実習指導を行うことを目的として、いつでも確認できるようにスタッフルームなどに掲示してもらうことを依頼した。

3. 外来との調整

実習開始前の8月、外来看護責任者、学部実習担当者と時間を設け、教員と昨年度の状況の確認と本年度の実習方法について外来部門ごとに話し合う機会をもち、外来実習で特に学習を深めてほしい視点と実習目標に関連づけた資料3について説明した。そこで各部門での患者状況や看護の特徴から、1週間の外来実習のスケジューリングや受け持ち患者の人数などを検討した。受け持ち患者の看護過程の展開、診療介助、処置の見学の他にも心臓リハビリテーション、看護外来、栄養指導、チームカンファレンスなどのイベントに学生が参加する機会を増やし、外来看護の学びがより深まるような提案がなされた。外来実習では、特にその人の生活、生活者という視点、外来での治療の特徴、セルフケア支援、チーム医療、連携についての目標達成ができるよう関わっていただきたい旨を伝えた。

IV. まとめ

外来実習では、病棟での受け持ち型実習だけでは捉えにくい「慢性の疾患をもち、生涯にわたりセルフケアが必要となる成人患者および家族」への理解を学生に促す効果⁴⁾が指摘されている。また、学生が外来実習で治療を受ける患者と直接対話することにより、病と共に生活することの意味や、その人らしい生活や人生を支える重要性、患者の生活に合わせたセルフケア能力向上への援助のあり方、治療が患者や家族に及ぼす影響を学んでいる⁵⁾ことも明らかにになっている。病棟実習と外来実習の両面から慢性期看護を捉えるという実習形態に関する報告は未だ始まったばかりであるが、近年の医療情勢から外来機能の強化が望まれる今、慢性期看護を理解する上で、外来看護の視点を包括した実習形態を構築していくことの意義は大きい。

外来実習を組み入れた新たな実習形態を確立するため

には、病棟と外来それぞれの療養の場にいる指導者と学生に関わるスタッフが、実習目標とその指導方針を共有して学生の指導にあたるのが前提となる。今回は、指導体制をより強化するために開発した「目標達成のための指導ポイントツール」(資料1, 2, 3)が学生に関わるスタッフへの周知のためのツールとして活用されており、今回の取り組みを通じて、臨床指導者と共通認識の上に立った建設的な指導体制作りを検討するための土壌が整いつつあることが、指導者を対象としたアンケート結果からうかがえた。さらに、学生が慢性期看護の役割を、患者や家族の現在までの軌跡から将来を見据えた長期的視点で捉えられるようになるには、最終的に病棟、外来で得た学びを統合することが必要である。教員は、実習期間中、臨地実習指導者が各実習の場で指導した視点を意識的に引用しながら、学生が病棟と外来実習の学びを統合して捉えられるように、特にまとめのカンファレンスの際に意識して指導した。今回の取り組みにより、学生の学びがどのように促進されたかについては、実習中であり評価ができていない。現在、実習終了時のアンケートにおいて、外来実習と病棟実習を組み合わせた実習形態において学んだことについて、学生が記載する欄を設け、協力を依頼している。今後回答内容を検討し、学習効果を知る一助とする他、改善策を見出し、次年度の教育内容に反映することを課題とする。

引用・参考文献

- 1) 飯岡由紀子, 高田幸江. (2014). 病棟実習と外来実習を組み合わせた臨地実習成人看護学実習（慢性期）の構築. 聖路加看護大学紀要, (40), 112-117.
- 2) リンダJ. カルペニート＝モイエ著. (2011). 看護診断ハンドブック第9版. 竹花富子訳. 東京: 医学書院.
- 3) 安酸史子他編. (2014). ナーシンググラフィカ 成人看護学④ セルフマネジメント 第2版, メディカ出版.
- 4) 長瀬雅子, 高谷真由美, 青木きよ子, 他. (2011). 慢性的な疾患状態を抱える成人患者を対象とした看護学実習における体験型実習の意義. 医療看護研究, 8 (1), 1-7.
- 5) 中田芳子. (2006). 外来看護実習での学生の学び. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集, (15), 22-32.